

関所・宿場・物資流通の拠点

贊川宿



横浜開港資料館所蔵写真より

木曾・贊川 木曽路の開通は古代までさかのほるが、贊川の宿駅の存在を文献のうえで確認できるのは、16世紀半ばの戦国時代に至ってからである。天正18年(1590)には、天下統一を果した豊臣秀吉が木曾を直轄領とし、贊川に番所を置いたことが知られる。秀吉が木曾を重要視したのは、東西交通の要衝を抑える軍事的意味合いのみならず、木曾で産出される豊富な木材とそれらの流通路を掌握する経済的意図があったものと考えられる。慶長5年(1600)に、関が原の戦いで勝利し政権についた徳川家康も、同様の意団を持って木曾を直轄領とし支配、ここに物資流通の起点となる近世木曽路の基礎が築かれた。

慶長5年、徳川家康により福島に居を構えた山村家が木曾代官に任じられて木曾を支配し、慶長6年(1601)に始まる近世宿駅制度により主要路として再整備された。元和元年(1615)に尾張藩領になつてからも山村家が尾張藩家臣として引き続き統治の任に当たつた。木曾は宿場を核にして独自の経済的・文化的まとまりをもつ地域に発展する。木曾11宿(北から、贊川・奈良井・藪原・宮越・福島・上松・須原・野尻・三留野・妻籠・馬籠の各宿)

贊川の名の由来 いにしえに、温泉が湧き出たところから熱川と称していた(『木曽路名所図会』による)が、その後、温泉が涸れ、麻衣廻神社の本社である諏訪神社の神事の贊として、この地で取れた鯉や鮎を献じたことから「熱」を「贊」に改められたという伝承がある。

贊川宿の成立 中山道は慶長7年(1602)に定められ、贊川宿は奈良井川が山地から松本盆地へ流れ出す手前、尾張藩の北端に位置し、宿場としてのみならず木曾の周辺地域を結ぶ物資流通の拠点としても繁栄することになった。南北に延びる中山道に面して家並みが現在400mほど連なる集落である。

宿場の西側は、観音寺や麻衣廻神社などの寺社が東面して配されている。北から下町・中町・上町と分かれ、若干の上り坂になっている。三町の境は広小路として街道と直交する路地が設けられた。西側には厄除け・火除けの神である津島・秋葉社と水汲み場を置く。水場は4ヶ所あり豊富な水が現在も流れ出ている。



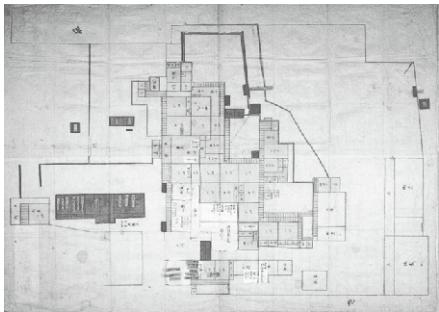
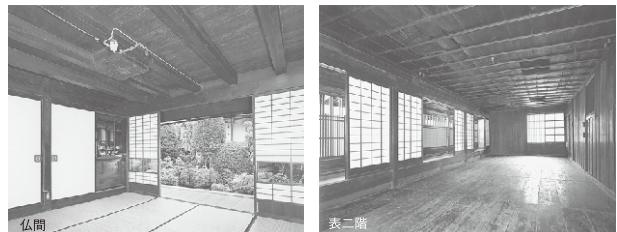
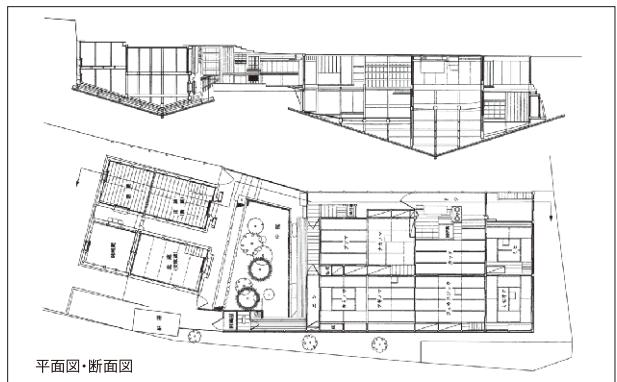
主屋南西から

深澤家住宅(広小路の角に残った町家)

国指定重要文化財 平成17年7月指定

上町と中町との境、中山道の東側となる角地に位置する。上町では格段に大きな家であり、間屋や年寄役の屋敷と遜色ない規模といえる。主屋は中山道に西面して建ち、背面に中庭を隔てて土蔵が2棟、南北に並んで建つ。このうち北の土蔵を文庫倉、南の土蔵を新倉と称する。主屋は桁行5間5尺・梁行9間半・2階建て切妻造・平入の建物。近世後期の町家として貴重。当初は三段重ねのシトミや跳ね上げの大戸口を装備し、出し張り部分にコヤネを付けた典型的なものだったことが、痕跡などから明らかである。

屋号を加納屋と称し、近世後期から茂吉を代々襲名した。木曾を拠点に遠隔地商売を続けてきた典型的な贊川の商家である。幕末維新期当主は萬助で、安政5年(1858)「一代苗字御免」を公的に許可されている。この時期の萬助が贊川屈指の有力者に成長していたことを裏付けている。



「贊川本陣絵図」市指定有形文化財

宿駅制度の廃止により、農林業をはじめるものが多くなり、河岸段丘上の緩斜面に農地を広げた。明治末年の中央本線全通により、行商と宿泊業は終焉した。

◆本陣・脇本陣

現在では残っていないが、間取りを描いた絵図(市指定有形文化財)が残り、贊川関所に展示されている。文久年間(1861~1864)と思われる「贊川宿絵図」には、街道の東側に62筆、西側に49筆の合計111筆の家が記され、本陣1・脇本陣1・問屋1・年寄り3・神主1・旅籠12があった。地割りはほぼ現在と一致している。

◆火災の被害

建物自体が木造で燃えやすい造りであった事と、宿全体が河岸段丘上の高台にあり、大量の水を確保しにくかったことによる大火が多い。記録に残る近世の大火は天明2年(1782)10月と嘉永4年(1851)12月の2回で、共に宿中のほぼ全家屋焼き尽くす大火災であった。その後も明治29年・大正7年・昭和5年(1930)と3回の大火があり、中町・下町を中心に甚大な被害をもたらしたが、3度とも上町の家々は類焼を免れたという。そのため、現在の贊川宿では、上町近辺の一部を除き近世までさかのぼれる町家は見られない。

◆贊川の暮らし

贊川の南に隣接する奈良井は、近世中期、漆器や塗櫛など木製品の一大産地として成長していた。奈良井で作られた檜物細工や漆器を贊川が全国へ販売する分業関係がこの頃は形成されていた。贊川宿の生業が近世を通じて徐々に流通業へ移行した様子が「中山道宿村大略図」などからうかがえる。また、行商によって経済的実力を備えた有力者が存在したと伝えられている。「奈良井過ぎた寺過ぎた・平沢過ぎた宮過ぎた・贊川過ぎた蔵過ぎた」の言い伝えもある。

贊川宿までのアクセスマップ

